名古屋女子大学　紀要　57（人・社）351～362　2011

考古資料を取り扱う博物館実習指導について

窪　佳世*

Guidance to Organize Archaeology Remains in Museum Training

Kayo KUBO

Ⅰ　はじめに

博物館実習では、これまで学んだ博物館概論や博物館各論の理論をベースにして、実物資料の取り扱い方を実践的に学んでいく。本稿では、2010年度前期に本学で行った、考古学資料を取り扱った学内での博物館実習における指導方法[1]について考察をする。

考古学の遺物の整理の基本を学びながら、最終的には成果発表として模擬展示を行う。遺物の整理作業の主なものは、洗浄、注記、拓本、実測、トレース、遺物カード作成、接合・石膏復元などがある。遺物の展示には、展示台設営、キャプションやパネル作り、遺物を分類し、陳列する作業がある。それらについて順を追って考察しながら、よりよい指導方法を見出していく。授業では、毎回受講生が、授業内容、自分の考え、感想・意見などを書いて提出する。それらに基づいて考え、次回の授業に活かす工夫をする。履修者数は28名、授業時間は１コマ（１時間30分）を10回行った。

Ⅱ　方法

１．考古資料の取り扱い方

資料に対する基本姿勢を最初に学ぶ。それらを理解しておかなければ、なぜ大切に扱うことが必要なのか、遺物とその記録をセットにしておく（箱に遺跡名を記載し、カードに出土地点の記録をする。遺物には必ず注記し、遺物を出したら、また同じ所に元通りにしまう）という原則が分からないまま、進めることになる。

考古資料がベースとなっている考古学は、歴史学の一分野である。そして、考古資料が出土する遺跡は、大地に刻まれた人と自然の痕跡である。遺跡の中で、持って出られないものが遺構、持って出られるものが遺物である。受講生の感想の中で、この遺跡（全体を示す）、遺構（柱穴など）と遺物（土器、石器など）の概念があいまいだったという意見があったため、初めにおさらいをしておく。また、この遺物は埋蔵文化財ともいう。考古学の主な研究方法には、層位学、型式学がある。考古資料は出土する層位と、型式から年代を判断していく。発掘におい

* 本学非常勤講師

ては、土を掘って調査をしていくため、掘り進めていく内に、遺構の中の土は外に出され、元には戻らない。残るのは図面、写真、日誌などの記録と遺物である。そのため、遺物が何処から出土したものか、遺構がどのように構築されたか等の記録が最も大切である。そして、遺物は文化財であるため、記録とともに破損や紛失をしないように大切に取り扱う。考古資料は、歴史資料として重要であるということを理解し、それが取り扱う態度に表れることが肝要である。それらを初めに受講生に理解してもらうことが大事である。

２．遺物の洗浄

今回は、古代寺院跡で採取された瓦や須恵器を用いる。最初に、これらの遺物を洗浄する。直接遺物に触れるため、作業に当たる者は、爪を切り、指輪、時計、ネックレスなどははずし、長い髪はゴムで縛る。必要に応じて手袋をはめて作業をする。学内実習では、受講生がそういったマナーを覚えることも大切である。

必要な道具は、バケツ、ブラシ、先を短く切った筆、汚れを取る竹串、そして水道水である。

遺物は遺物カードと一緒にビニール袋などに入っている。遺物カードは遺物が何処から出土したものなのかが記されている。遺跡名、グリット名、遺構名、層位名、日付が書かれているので、必ず遺物と一緒にしておくことが重要である。洗い終えた遺物を置くザルもしくは新聞に、遺物カードを洗濯ばさみなどで留めておくと移動などの際、紛失しない。慣れるまでは、一人一袋ずつ責任を持って洗い終えるようにする。教員は一人の受講生の１コマにおける作業分として、遺物が50個ぐらい入ったものを３袋程度用意する。１コマに一袋だけの作業では、袋ごとにそれぞれ出土する位置が異なっているため、別袋にしているという原則が理解できない。そのため、受講生には複数の異なる袋の遺物を担当させる。遺物と遺物カードを必ず一緒にしておくことをしっかり理解させ、他の異なるところから出土した遺物と混合しないことを体で覚えさせる。

受講生は、遺物をきれいな水で洗浄し、ブラシで土や埃などの汚れを落としていく。きれいにすることにより、土器の紋様や色調をはっきりと見ることが出来る。中には、洗う内に墨書やヘラ記号などを発見出来ることもある。洗浄中に気が付いたことを記録しておく。

遺物はただ洗えばいいというものではない。考古資料にとって重要なのは、どのような層から出土しているのかということである。観察は土器に土が付いている段階から始まる。洗い終わって土器に付いていた土がバケツの底に溜まっているのを捨てる際にどのようなタイプの土かを観察しておく。洗浄は、遺物がどのような土から出土しているのかを観察するいい機会である。

また、洗い方であるが、縄文土器、弥生土器、土師器など焼成温度の低いものや表面が風化しているものを、ごしごしこすって洗うと表面が削れて取れてしまう。そのため、洗う時には特に注意が必要である。軟質の土器には、毛を短く切った筆で洗うと表面が摩耗しにくいため、初めての受講生でもやりやすい。受講生には、土だけ落とすように心掛けてもらう。初めての洗浄で失敗しがちなのは、表面にブラシの跡が付くぐらいこすって磨耗させてしまい、かたや断面には土が付いたまま洗い終えてしまうという例がある。受講生には、右手にブラシを持って水をたっぷり含ませ、左手に土器の破片を持ち、優しくトントンとブラシを若干左右に動かしながらたたくように洗うよう指導する。たたき洗いだけであると、なかなか土が落ちず作業が進まない。実際の洗い作業では、一つの遺跡につきコンテナに何百ケースと出土遺物があるため、慎重・着実かつ素早くこなしていかなくてはならない。受講生には、水がひどく汚れたらその都度、そして一袋洗い終えた後は、必ず水を替えさせるようにする。また、水を捨てた

とき、バケツの底に何も残っていないことを確かめさせる。

洗った後は、ザルもしくは新聞の上に重ならないように並べる。ザルは通気性がよく、洗浄後の遺物が大量にある場合、重ねて並べられる。新聞は遺物の余分な水分を吸ってくれるため、遺物を乾燥させやすい。遺物に水分があっても水を吸収してくれるので、雑菌が繁殖しにくくなる。土器を洗い終えたら、風通しが良く、通行のじゃまにならない場所に一箇所に置いておき、最低一日以上は乾燥させるようにする。遺物を全部きちんと洗い終えて、乾燥させる場所に置き、道具を洗って所定の位置に片付けさせる。

３．遺物の注記（マーキング）

前回、受講生が洗浄し、乾燥させた瓦や須恵器などに、今度は注記を行う。注記とは、遺物がいつ何処から出土したのか、その情報を遺物に直接記録しておくことである。必要な道具は、下に敷く新聞紙、土器、筆、墨汁である。基本的には細い筆で、墨汁で書く。墨は落ちにくいということが良い点である。筆は、土器の表面に凹凸があっても滑らかに描くことが出来る。ただ、黒い土器の場合、墨で書くと字が見えにくいため、白いポスターカラーを使って、細筆で書く。表面が磨耗して注記した字が消えてしまう場合は、上にニスを塗ると落ちにくい。

注記する内容は、遺跡名、遺構名及び層名、出土年月日、袋番号である。遺跡名は、簡略化するためにアルファベットに置き換えることもあるが、もしそのアルファベットと遺跡名の対応表が紛失した場合、分からなくなるため、重要な遺物には、きちんと正式な遺跡名を記録する。最近では、大量の遺物の注記に対応するため、先の細いペンで書いたり、ジェットマーカーで印字したりする場合がある。

注記をする場所であるが、破片の場合、内面の端に書く。初めての場合、まず裏か表かを判断する段階から難しいということが、受講生の感想にもよく見られる。コツは、壺や甕や坏などの破片には、カーブの内側に書くようにすることである。教員はいくつか、注記する面を示し、実際に書いて見せて説明する。書く大きさであるが、土器の観察の邪魔にならないように、小さくまとめて書く。ただし、小さくても文字がつぶれたりしないように、読みやすく書くということに技術を要する。学芸員は、学門だけでなく、こうした技術も必要である。受講生は注記を終えた後、記入に漏れや間違えがないかを確認して遺物を元の袋に戻す。使った道具は元の位置に片付け、土埃が落ちるため必ず机や床を水拭き掃除する。

４．古代瓦の拓本

考古資料では、縄文土器や瓦など表面に紋様がある場合、その模様を図示するために拓本を採ることがある。実習では白鳳時代の格子目の叩き目が付いた平瓦と、奈良時代の縄目の叩き目がついた平瓦の拓本を採る。叩き目は、成型するためや、空気を抜くためにつけられる。中には、植物の模様や寺院名が捺されているものもある。受講生には、平瓦が時代の推移によって、布目が細布から荒布へ、叩き板が格子の溝から縄を巻いただけのものへの変化することを観察させる。

必要な道具は、瓦片、画仙紙、タンポ、墨、脱脂綿、水、霧吹き、新聞紙、はさみである。

まず、平瓦の表面である布目の拓本を採る。拓本の採り方は、画仙紙（実習には、美濃和紙が破れにくく丈夫で使いやすい）を瓦片より１～２㎝大きめに切る。瓦片の上に画仙紙を載せ、１～２㎝にはみ出た縁を放射線状に切る。２㎝大にちぎって丸めた脱脂綿に、霧吹きでたっぷり水を含ませる。遺物の上に表面を上に向けた画仙紙をのせ、その上に水を含ませた脱脂綿で中央から外へと押さえて、画仙紙に水を湿らせていく。表面が湿った状態から乾いて白くなっていくその瞬間に墨をタンポでまんべんなくつける。墨が薄いと模様がぼやけてしまうし、墨

が濃いと模様がはっきり分からなくなるため、模様がはっきり見やすい濃さにするよう気を付ける。初めての受講生は、墨を濃くしすぎてしまう傾向がある。受講生の感想に、模様がきれいに出る墨の濃さにすることが難しいというのがあった。濃すぎるのを防ぐためには、墨をつけたタンポに、まだ墨をつけていないタンポをぽんぽんと押し付けて墨を写して、それを画仙紙に押し付けていくとよいため、受講生にもそのように作業させる。拓本が完成したら新聞に静かにはさんで乾かすようにする。

受講生は次に、裏の格子目、奈良時代の瓦の布目、縄目と順に拓本していく。乾いたら、はさみで縁を切り、方眼紙にレイアウトをする。瓦が本来どの向きに葺かれていたのかを考えながら貼るようにする。方眼紙の縦線と横線と、布目の縦糸と横糸を合わせて貼らせる。以上２片の瓦の表裏の拓本を、合計４枚貼って提出させる。遺物や道具をもとあった場所に片付け、周りに墨がついていないか確認しながら掃除するようにする。

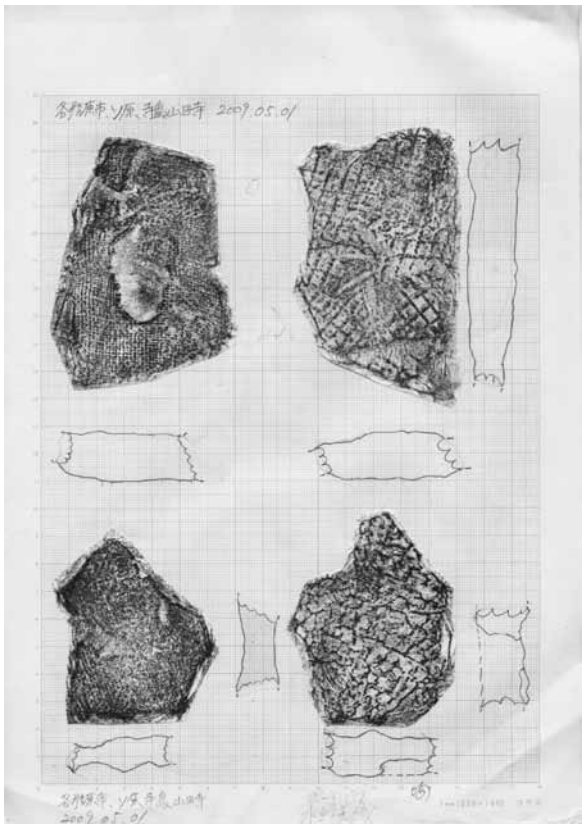


図１　瓦の拓本と断面実測図

５．遺物の実測

受講生は、前回の授業で瓦の拓本を作成したため、次はその瓦の断面を実測する。これにより、瓦の残り具合や断面の厚さなどがわかる。まず、拓本を貼った向きと同じ様に断面の向きを揃える。ディバイダーで厚みを測る。ディバイダーの先を紙に押し付けてほんの少し穴を開けて点を取る。その時、取った点がわからなくなるため、２Ｈの鉛筆でケバをつける。点を取ったら、それらを結ぶ。カーブはマーコという型取り器で形を取り、櫛の先端を鉛筆でなぞって書く。断面は割れ目という意味でギザギザに、端はまだ続くという意味で１㎜空けて２㎜の線を入れる。断面の実測で、作業に慣れたら、次は、石器の実測を行う。石器は縄文時代の石鏃を測る。このタイプのものは、小型で測りやすく、同じ様な大きさ、形、石質のものが揃えやすいことから、教員が選択した。

実測の方法は、まず、１㎝区切りのＡ４方眼紙、２Ｈの鉛筆、ディバイダー、三角定規、石器、固定用粘土（石器を紙に固定する粘土状のもの、ひっつき虫という商品名）を用意する。受講生は、石器を方眼紙の上に設置する。石器を表面に向けて、石器の中央を方眼紙の縦の線に、下の端は横の線に合わせて固定用粘土で固定する。この時点で、石器を用紙に設置することの難しさを訴える受講生がいる。線にあわせて、水平に置くのが思ったより難しいということである。その場合は、石器に三角定規を垂直に当てて、そっと線にあわせていくようにする。

教員は受講生が作業に集中出来るように、静かに落ち着いた雰囲気作りをすることが大切である。受講生は、石器を方眼に合わせたら、また同じ様に石器に三角定規を垂直に当て、石器の輪郭の点を取っていく。点を取ったらケバをつける。角や線の分岐点の点を忘れずに取る。なるべくきちんと点を多く取った方が、正確な図面になる。石器を横に移動させ、輪郭を太い線で描く。その時、丸くなぞらず、尖った所はきちんと尖ったように書く。次に、中の稜線を書いていく。稜線の中でも太いメインのものを先に書き、次に網目状に細い貝殻状痕を書く。貝殻状痕とは、人間が作った石器に見られる特徴で、図示しなくてはならない重要な事柄である。稜線は、輪郭より細く書く。それから貝殻状痕を一番細い線で描いていく。点は、石器の縁に三角定規を置き、ディバイダーで点の距離を測っていく。ディバイダーはコンパス状のもので、両先端が針のように尖っているため、けがをしないように、取り扱いに注意する。石器の細かい線を描いている時点で、受講生からなかなか線が見えにくいという訴えが出てくる。その時には、まず鉛筆で指し示せばわかる場合もあるが、それでもわかりにくい場合はルーペで見る。もしくは石器の上に白いチョークを優しく触れると、稜線にチョークがついてよく見えるようになるため、実際に書きながら示していくと、受講生に書くべき線がわかりやすい。細かい割れ目を図示するのは根気のいる作業である。受講生が途中で投げ出さず、時間まできちんと取り組むように、教員は机間巡視をして書き入れる線を示しながら指導する。受講生は瓦の断面と、石器の図面を書き終えたら、提出する。

６．遺物のトレース

次に、受講生は実測を行った図面のトレースをする。必要な道具は、実測図、トレーシングペーパー、ロットリングペン（実測図に合わせて太いもの、細いものを揃える）、ドラフティングテープである。

実測図の上にトレーシングペーパーの表側を上にして乗せ、上の端をドラフティングテープで動かないように留める。そうすると、手書き図面が透けて見えるので、それに従ってなぞっていく。基本的にペンでなぞって行く作業なので、受講生が他の作業に比べてとっつきやすく、やりやすいという感想があった。

しかし、注意する点は、線が途切れたり、波打ったり、ずれたりしないということである。受講生の感想を見ると正確にきれいな線を描くことが、思ったより難しいということであった。そのため、教員は３つのコツを的確に教える。一つ目は、線の細さを均一にするには、ペンを立てて書く。二つ目は、持つペンを中心にして、なるべく自分が書きやすい方向に用紙を動かして書く。三つ目は、一筆書きで一気に書くということである。

断面は塗りつぶし、割れ目にぎざぎざの線を入れる。割れ目の先はまだ続くという印として、１㎜空けて２㎜ほど続きの線を入れる。そういった図示する時の表示の仕方の原則も学ぶ。

次に、受講生は、前回実測した石器のトレースを行う。図の上にトレーシングペーパーを載せて、端をドラフティングテープで留める。ロットリングペンで、輪郭をトレースする。輪郭は太い線で、稜線は輪郭より細い線で、中の貝殻状痕は、もっと細い線で書く。これも、ペン先を紙に対して垂直に立てて、一筆書きで描く。石の角が尖っているにもかかわらず丸くなぞってしまわないように注意する。瓦の断面と石器のトレースが終了したら、提出する。

７．遺物の復元

遺跡で出土、もしくは表面採集される遺物の大多数は破片である。洗浄、器種分類、接合の後、復元を行う。復元を行う理由としては、展示をした場合に、完形の状態を理解しやすいからである。また、破片と破片の間の足りない部分を埋めていくことによって固定出来るため、

それ以上の破損、磨耗、パーツの紛失を防ぐことが出来る。

授業においては、復元の基本である、石膏を使った復元を行った。今日では、復元には石膏以外にも、バイサムなど粘土状のものも用いられている。石膏の良い点は、自然素材であるため、人体や土器に影響が少ないことである。また、水につけると石膏を外すことが出来、石膏が衣服や土器についても水で落とすことが出来る。復元は､あくまでも後世の推測であるため、元の状態が分かるようにしておくことや、必要な際に元に戻すことが出来るようにするということも念頭においておく。

必要な道具は、石膏、ペットボトルに入れた水道水（必要な水をこぼさないようにするため蓋付きのものが良い)、ラバーボール、石膏ベラ、シーチキンの缶の蓋を折り曲げたもの、肥後の守を折り曲げたもの、削り器、サンドペーパー、新聞紙、綿のガムテープ、メンディングテープ、段ボール紙で作った円形の大小の型である。これらの道具は使いやすいように加工が施されている。道具は自分で使いやすいように工夫することも覚えさせる。

次に、作業内容についてであるが、受講生はまず机の上に新聞を敷き、土器を一つずつ選んで置く。この時用いる土器は、今回の古代寺院跡のテーマとは異なる時代のものであるが、教員の方で山茶碗を選んだ。山茶碗は、鎌倉時代に東海地域で大量に生産されて利用された、基本的に無釉の陶器である。他の土器に比べて硬質で丈夫である上、口縁部の一部が欠けている状態のものがたくさん手に入りやすいため、教材には使いやすいからである。

受講生は、土器の土・砂を払い、欠けた部分のすぐ内側面に、横位置に沿いながら、メンディングテープを１㎝ほど手でちぎって貼っていく。これは、欠けた部分を石膏で埋めるため、土

図２　遺物の復元　成形

図３　遺物の復元　荒削り

図４　遺物の復元　削り

図５　遺物の復元　仕上げ

器の縁に石膏が付いてしまうのを防ぐために貼る。その後、割れた部分の外側にガムテープ（綿テープタイプのもの）を１㎝ほどに切って少しずつずらしながら貼り、カーブに沿いながらあてがっていく。ずれないように、山茶碗と同じ直径の円の型をボール紙で作り、それに合わせてガムテープの型を作る。これが石膏の型となり、重要な作業である。中には、ガムテープを太く切って貼ってしまったり、長く切って一度にまわして貼ってしまったりして、うまく型が作れない状況になってしまう受講生がいる場合がある。教員は一人ひとり全員の型がうまく出来たかチェックし、修正していく。

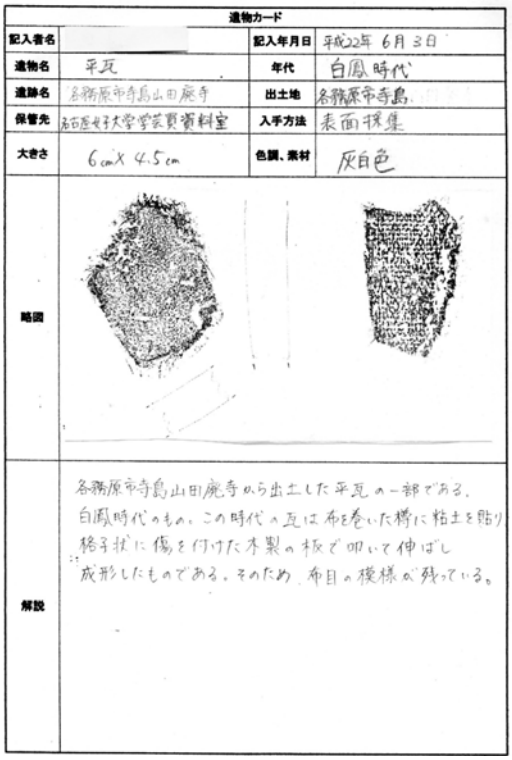
受講生は、次に石膏を溶かす作業に入る。この時、石膏は前の机の所定の位置において置き、方々への粉の巻き散りを防ぐ。水を入れたラバーボールに、石膏を静かに入れる。分量は、説明書通りの分量に従うが、逐一計量器で計るのは時間がかかる。そのため、洗濯用の粉洗剤を入れる計量スプーンを用いる。軽量スプーンは水用と粉用に分ける。まず、水をすりきり１杯と８分目（２杯目の水を少なめにする）入れ、粉をすりきり２杯入れる。粉を入れたら、底をトントンと下に打ちつけて空気を抜く。そのまま静かに待つ。そうすると、上に水、下に石膏というように分離する。上水をそっと捨てる。そこで静かに十数回程度かき混ぜる。そうすると、クリーム状の石膏が出来るので、これを先述の型に塗って載せていく。ここで、分離するまで待つことが出来ず、かき混ぜてしまうと、なかなか固まらないという失敗が起きてしまうため、教員の方でも注意して見る。石膏を載せる断面に筆で水をつける。溶いた石膏をヘラで型の中側に載せていく。欠けた部分と残存した部分が滑らかにつながるように、厚さや表面を揃えていく。左官職人が壁を水平に塗るように、手早くきれいになでながら仕上げていく。受講生の感想には、思ったより早く固まってしまい、失敗につながってしまったというものがあった。そのため、教員は、ヘラの持ち方や石膏の載せ方が効率よく出来るように指導する。石膏のヘラをグーで持ち、石膏をヘラの外側からすくって、そのまま平らにしながら載せていくという方法である。

受講生が作成する石膏が固まったら、ガムテープとドラフティングテープをはずし、余分な部分を削る作業に入る。石膏作業の時間を２時間使うことが出来る場合は、教員の方で削りは次の２時間目に行うよう調整する。削り器で、ざっと出た部分を削っていく。その時、山茶碗と同じ直系の丸い型を合わせながら削り、削りすぎを防ぐ。荒削りが終わったら、肥後の守という小刀を曲げた物で、さらに削っていく。削りすぎないように慎重に行う。また、器のカーブの部分は、半分に曲げたシーチキンの蓋の端で削ると、微妙なカーブをうまく削ることができる。最後は、サンドペーパーで削り、表面を滑らかにする。サンドペーパーは、まず目の粗いものでざっと削っていき、その後目の細かい方のもので滑らかに仕上げる。研磨が終わると、細かい石膏が山茶碗に付いているので、やさしく水で洗う。石膏の空気を抜ききらないで固めると、小さな穴が空く場合がある。その時は、水を含ませた筆で穴を湿らせ、その上に乾いた石膏で蓋をしていく。受講生は作品が仕上がったら提出する。復元など汚れる作業の時は、きちんと道具を洗い、机や床の水拭き掃除を行う。

８．遺物カードの作成

全国の遺跡からたくさんの遺物が出土している。それらの膨大なデータを整理して、今後活用していくために、遺物カードを作成することも大切である。これらは、excelなどで作成して、パソコンでデータ化し、検索などが出来るようになると、博物館資料としてより有効に活かしていくことが出来る。

遺物カードは、教員が実習用に作成した。遺物カードの内容は、１．記入者名、２．記入年



遺物カード

記入者名		記入年月日	平成22年 6月3日
遺物名	平瓦	年代	白鳳時代
遺跡名	各務原市寺島山田廃寺	出土地	各務原市寺島
保管先	名古屋女子大学学芸員資料室	入手方法	表面採集
大きさ	6cm×4.5cm	色調、素材	灰白色
略図			
解説	各務原市寺島山田廃寺から出土した平瓦の一部である。白鳳時代のもの。この時代の瓦は布を巻いた樽に粘土を貼り格子状に傷を付けた木製の板で叩いて伸ばし成形したものである。そのため布目の模様が残っている。		

図６　遺物カード

月日、３．遺物名、４．年代、５．遺跡名、６．出土地、７．保管先、８．入手方法、９．大きさ（縦、横、厚み）、10. 色調（土色帖を利用）、素材（土器、石器、木製品、金属製品などに分類）、11. 略図（できれば写真や実測図を貼り付けるが、自分で略図を書いてみる。）、12. 解説（遺物の特徴的を記す。）、というように、主なものを12項目挙げた。項目は、受講生がどのようなことを入れることが必要なのかをきちんと覚えられるように、あまりたくさんにせず、重要なものだけにした。この遺物カードに受講生が、これまで授業で学んだことを基にして記入する。

解説は、この後行う展示で利用するキャプションの内容に反映させる。

９．キャプション、パネルの作成

学芸員になった時、キャプションやパネルの作成は、実際には業者委託という場合もあるが、学芸員自身でも作成の方法を知り、経験を積んでおいた方がよい。キャプションの文字は、土器の名称、遺跡名、年代、その特徴の端的な解説を入れる。それらは注記の後、土器の器種分類をする時、参考文献を見ながら判断していく。

キャプションは、のりパネ（糊つきパネル）に、見出しを印字した紙を貼り、定規を当ててカッターで切って作成する。のりパネは、硬くて切りにくい。そのため、切り口がガタガタになったりしてしまう。特に力の弱い女性では一度にスパッと切れない。そのため、まず上半分を切っておいて、次に下半分を切るというように、２度に分けると、楽にまっすぐに切ることが出来るということを、作業の中で見出して、実践した受講生がいた。

また、最近では、カッターをあまり使ったことが無く、扱いに慣れていない受講生も若干いる。教員は、カッターの安全な持ち方や特にカッターを切るときの向きを、手前にゆっくり引

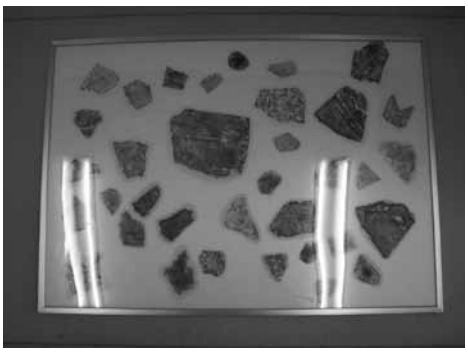


図７　古代瓦の拓本パネル１

図８　古代瓦の拓本パネル２

くように使うなど、安全管理に心がける。

次に、パネルは、受講生が作成した瓦の拓本をコピーし、それをレイアウトして作成した。そこで瓦の叩き目の紋様にも色々なものがあり、それらが紋様としても美しいということを受講生が自分で気付き、それらを比較しながら理解することが出来るように、展示していた。このように、自分でより良い方法を見出し、創意工夫をすることが大切である。

10. 遺物の展示

名古屋女子大学博物館課程では、これまで、大学近郊にある衣の民俗館や荒木集成館において、「天白川左岸域の古窯」「古代の玉造り」「東海地域の朱･鉄･銅展」「なんでも名古屋城」などの企画展、それに伴う講演会、シンポジウムを行い、地域の生涯学習に寄与してきた。

今回取り上げる、学内実習での摸擬展示は2010年度前期に、美濃の古代寺院跡を題材に行った。展示に使うのは、展示名の看板、挨拶文、山田廃寺跡、大杉廃寺跡、北野廃寺跡、願興寺跡の遺物及びキャプション、拓本作品パネルである。まず、展示台の用意をする。大小、高低差のある８つの展示台を並べる。高い方の展示台には、模様が見やすいように軒丸瓦片や軒平瓦片の中で残りのよいものを展示する。

展示方法は、布張りの生成り色の展示台にフエルトを乗せ、その上にキャプションと遺物を並べていく手法である。フエルトを敷くのは、土器を傷めないためと、フエルトの色とのコントラストで土器を見やすくするためである。受講生が自分で洗浄、注記したものを並べていくため、遺物を覚えることが出来て、間違いもしにくい。一つの遺跡ごとに一つの展示ブロックを利用した。それらを器種や時代ごとに区分けして並べていく。展示するのは、土器片である。

図９　古代瓦の拓本の展示

図10　軒丸瓦片の展示

図11　平瓦片、丸瓦片、須恵器片の展示

図12　須恵器片の展示

破片は、ちょうどこの展示をしている時分に開催されていた瑞浪市陶磁資料館（「瑞浪出土の中世陶磁」－土岐氏とその一族の時代、５月16日（日）～８月１日（日）開催）などでも展示されていた。破片である上、色々な器種があるため、選択･分類して並べるのにも大変であるため、受講生一人につき、フエルト一枚分ずつを分担して遺物を並べていった。

古代寺院では、瓦の外に須恵器や土師器、灰釉陶器が見られる。須恵器にも坏身、坏蓋、高坏、壺、甕、瓶などの器種がある。これが破片となると、受講生から、分類が難しいという感想が出てくる。そこで、教員から、甕は縄目の叩き目があり、坏蓋は、扁平で渦巻状に轆轤目が見えるため、比較的判断が付きやすいことをアドバイスをする。受講生が、遺物の特徴を詳細に観察しながら捉えていく目を養うようにしていく。そのため、まず、自分で同じ種類だと思うものを一箇所に並べ、キャプションをつけていく。ここで、並べることが意外と難しいという受講生の意見が出てくるが、まず出来るところまで自分で陳列し、その後で教員の方で、説明しながら修正していくようにした。そしてまた、受講生がそれを踏まえながら、自分で並べていくことによって、ものを見て考える力を身に付けるようにした。その中で、より見やすい陳列方法を見出していくようにした。

Ⅲ　結果及び評価

まず初めに、実習を始める前に考古資料を扱う姿勢を教えることで、整理作業を行っている間も、最終的に展示した時においてもそれが活かされていった。そして、実習中において考古資料を歴史資料として大切に扱い、元あった場所にきちんと戻し、資料と記録をセットにしておくという原則を守ることが出来た。また、実習時のマナーにおいても、徐々に浸透していったように思われる。実習が始まると、大半の受講生が遺物に金属が当たらないように時計を外し、静かに説明を聴いて真剣に作業に取り組むことができるようになった。

そして実習においては、授業の最後に、授業の内容、自分の考え、感想、意見を書くことによって、本日行った作業を振り返り、復習して、受講生と教員が相互に次回の授業に活かすことが出来た。また、実習では作業を行う中で、この様にしていったらいいのではないかという自分なりの見解が生まれてくるため、それを記録し、次回に活かすことが出来た。

考古資料の整理作業には、大まかな流れは大体どこでも同じように進められるが、一から十まできっちり、この方法でしなればいけないという決まった方法があるわけではない。最終的に理にかなった、正確な拓本、実測図、復元ができればよい。そのため、使う道具は自分が使いやすいように加工したり、合理的な作業が出来るように工夫していったりすることが必要となってくる。今回の実習では、受講生のそういう自分なりの工夫を垣間見えることが出来た。そして、よりいいものを作成しようという意欲も生まれてきた。この様にしてやる気を引き出しながら、考古資料の整理の主な方法を一通り理解出来るようにした。

今回は､受講生が遺物の洗浄から展示に至るまで､なるべく同じ遺物で作業することにより、一つの遺物がこのようにたくさんの調査･研究の工程を経て展示に至るということを理解した。また、違うアプローチで何度も同じ遺物に触れることによって、より深く遺物を観察し、そして知り、記憶することが出来たのではないかと思われる。

受講生による授業評価においては、授業を総合的に見た満足度は大変満足が62.5％、概ね満足が37.5％であった。不満足という評価はなかった。授業においての気配りや工夫が、この様

な授業評価につながったのではないかと思われる。また、受講生の感想は、「こんな古いものを実際に触れるの?!という感動がある授業でした。」「いろいろな実践的知識を身につけることができた。とても良かったです。」「一人ひとりていねいにみてくださって嬉しかったです。拓本が面白かったです。」と書かれていた。実践的に色々な体験ができるという内容は、受講生の評価にも結びつくということが判った。

註

[1] 以前、この課題に取り組んだことがある。
深貝佳世「博物館学指導研究１～資料収集から企画展示まで」(『きりん 第10号』、2006年3月)、深貝佳世「博物館学指導研究２～資料収集から企画展示まで」(『きりん 第11号』、2007年３月)

謝辞

名古屋女子大学博物館学芸員課程は、平成10年度から平成22年度まで13年間続けられましたが、惜しくも今年度でその歴史の幕は閉じられます。博物館学芸員課程においては、本学の歴史学を担当されていた丸山竜平教授が、立ち上げの段階から平成20年度まで尽力されました。学内での考古資料の実習は丸山教授、文献史料の実習は遠山佳治教授が担当されました。校内実習では７・８時限の授業であったため、遅くまで熱心に指導されていました。博物館実習や博物館見学など学外での指導においては、土曜日や日曜日でも近くは名古屋市内から遠くは山口県など津々浦々赴かれ、学生一人一人に励ましの声をかけておられました。丸山教授の退官後の２年間は、谷口富士夫教授が窓口となられ、また筆者が考古資料の実習担当となり、遠山教授の指導の下、最後の校内実習を終えました。幸い博物館課程を履修する受講生も28名おり、最後まで活気に満ちていました。

最後になりましたが、本学の卒業生である筆者に考古資料の学内実習を担当する機会を与えてくださった、丸山教授、遠山教授、谷口教授に心より感謝申し上げます。

Ⅳ　要約

考古学資料を取り扱う博物館実習の指導を、美濃の古代寺院跡の瓦や須恵器などの遺物を実際に整理・展示する中で、実践的に行った。その内容は、遺物の整理においては、洗浄、注記、拓本、実測、トレース、石膏復元、遺物カード作成を行い、最終的には成果発表として模擬展示を行った。

1．実習で考古資料を初めて扱う受講生が、どのようにしたら効率よく高度な技術を習得出来るのかということ。
2．考古資料は、歴史資料として大事だということを理解し、それが取り扱う態度に表れることが重要であること。
3．資料に対峙するときの姿勢、マナーを身に付けること。

以上を鑑みて、いろいろなアイデアを出しながら考察した。洗浄、注記、拓本、実測、遺物カード作成、キャプションづくり、展示に至るまでなるべく同じ遺物に関わることによって、遺物が様々な工程を経て展示に至っていることや、遺物の様々な観点からの観察眼を身に付けることが出来た。

Abstract

In the museum training, I taught students how to treat, organize and exhibit archaeological remains practically using real tiles and earthen vessel discovered ancient temple ruins of Mino region. Specifically the students experienced washing, note, rubbing, meacurement, tracing, gypsum restoration and description card.

Finally the students exhibited archaeological remains by themselves.

1. How can the students treat archaeological remains for the first time acquire advanced skills?

2. The students understand archaeological remains are important as historical materials and treat them carefully.

3. They acquire the attitude and manner facing archaeological remains.

In these points of view, I considered with various ideas.

The students understood exhibition involving wide range of process and acquired observational ability from various points of view.